

明治大学 S F 研究会 旧会誌廃刊と新会誌 テクノクラートの聖母創刊にあたって

明治大学 S F 研究会 部長 渡 浩一

ぼくが SF 研究会の部長を引き受けたのは明治大学の専任になったときだったと記憶している。中学時代の恩師で採用に当たってもお世話になった前部長の坂上博一先生から、よろしく頼むと言われて、断れるはずもなくお引き受けしたのである。それから 26 年、部長を続けてきているわけだが、正直、決して褒められた部長ではなかった。SF にはあまり興味がないこともあって、要するに、必要に応じて、求められるままに書類に署名・捺印するだけで、その活動に積極的に関わろうとしたことは一度もなかった。

それが昨夏、突然その活動に部長として関わらざるを得ない状況に陥った。まさに青天の霹靂であった。要は、SF 研の活動実態に本来のあるべき活動からはかけ離れた面があり、しかもそれがいささか学生としての品位を疑われるようなものであることが、ある告発により明らかになったのである。以来、部長として、自浄能力を発揮して活動を正常化し、本来の SF 研の活動に立ち戻るよう幹事長をはじめとする執行部メンバーに求めて来たが、なかでも、正常化の象徴として、SF 研にふさわしい内容の会誌の再刊を強く求めて来た。

今、それがこうして現実のものとなった。部長として大きな喜びとするところである。そして、約 1 年前に廃刊を命じた前の会誌を目にした時の衝撃を思い出し、安堵の胸をなでおろしている。

今でも、学生のサークル活動はできるだけ学生の自主性と責任に任せるべきもので、部長はその活動にできるだけ口出しすべきではないと考えている。しかし、そうした理想が実現するための大前提は互いの中に信頼関係があることである。学生も部長も、自らの立場を自覚し、節度と責任を持ち、互いに敬意を払い信頼を裏切ることのないよう行動していきたいものである。

SF 研は半世紀以上前に設立された、和泉と駿河台に部室を持つ歴史ある大学公認サークルである。時代に即応しながらも、その原点を常に忘れずに、さらなる発展を遂げていくことを祈念してやまない。

2016年7月22日 記

明治大学 S F 研究会 幹事長 神田 隼

『テクノクラート (technocrat)』という存在をみなさんご存知でしょうか。テクノクラートとは「高度な科学技術の専門知識と実践的なノウハウを持つ技術官僚のことです。今回、明治大学 S F 研究会では前会誌を廃刊し、新会誌を創刊するということになり、新しい作品創作者の母体を作るという事で『テクノクラートの聖母』という名前にさせていただきました。創作人数こそ少ないですが、今後も真面目にエンターテインメント性の高い創作を続けていきますので、どうぞお楽しみください。

目次

旧会誌廃刊と新会誌創刊にあたって	3
目次	3
幻想文学研究者・翻訳家 風間賢二	4
特別インタビュー	4
S F 映画批評	4
テラフォーマーズ V S 俺	11
淡路 関明	11
小説『テクノクラートの聖母』	13
小説・神田隼／絵・あしゅう	13
SCP 創作	21
SCP — 2124 に関する報告書	21
どんちきだいぶ	21
編集後記	23



▲『悪徳の栄え』
1959年、現代思潮社から出版された際には猥褻文書として発禁処分に。

▼**澁澤龍彦**
フランス文学者、評論家、小説家。マルキ・ド・サドを中心にフランス文学を翻訳・紹介。



ように文学少年ではなかったから、スタンダードとかバルザックとか言われても誰それって感じ。でも、ぼっちになるのは嫌だったから、まずは基本的な世界文学全集から手をつけ、ついで専攻のフランス文学を読み漁った。けっこう嫌いじゃなかったんだね、読むのが楽しかった。それで行き着いたのが澁澤龍彦。
——マルキ・ド・サドの、ですか。
風間 そう。僕の最初の読書指南役は澁澤龍彦なんだね。色々基本的なフランス文学を讀んだ後、もっとマイナーなものを探しているうちサドに出会った。もちろん作品に衝撃を受けたけど、その翻訳者のことも気になった。澁澤龍彦はサド裁判なんかの事件もさること

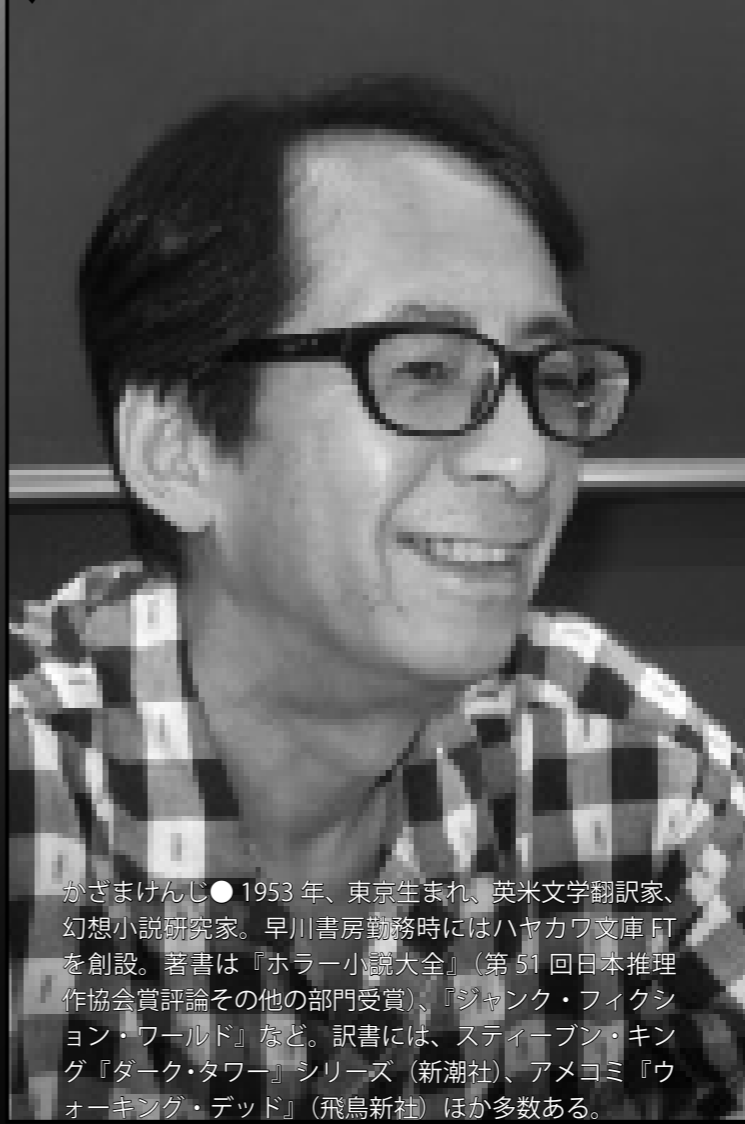
——早川書房へと就職したのもそれが関係していますか？
風間 もともとその手の文学を取り扱っている出版社に就職しようと思ったんだけど、マイナーなジャンルだから数人でやりくりしている極小出版社がほとんどだった。マニアックな分野を扱っていて、ある程度大きい出版社と言え、早川書房が東京創元社くらいだったからそこに就職を決めた。ちなみに東京創元社は落ちた（笑）。その出版社を同時期に入社試験を受けた長谷川晋一氏は今や社長だよ。僕を落として彼を採用した東京創元

ながらファクションや趣味嗜好なんかも特徴的だし、当時としては珍しい在野の人だった。それで澁澤龍彦とサドからフランスの異端文学に入って、他の国はどうなのかと思い始めた。ドイツだと種村季弘、イギリスだと由良君美、アメリカだと特にというわけではないけど荒俣宏が異端文学を扱っていて、次に彼らの著作をガイドブックにしてアンチ・リアリズムの作品を読んだ。当時60年代カウンターカルチャーの流れでそういう幻想文学が発売されたんだけど……面白かったんだよね、特にガチの純文学なんかと比べると（笑）。だから学生時代に読んだ澁澤龍彦や荒俣宏の異端文学・幻想文学の紹介に触発されて、今日の僕の方角性が定まったと言えるね。

——『スターウォーズ』のヒットですね。
風間 70年代終わりからSF映画がどんどんヒットして、「SFが売れる！」となった。僕の所属していたSF編集部は早川書房の中でもミステリー編集部に比べて売り上げがイマイチだった。なにしろ、SFを出すとその会社はつぶれるというジンクスがあった時代なんだよ。けれど、その流れが変わった。それで勢いに乗って78年にSFの単行本を出すという企画が持ち上がったんだよね。それが海外SFノヴェルズ。

——間違えたのですか？
風間 うん、間違い（笑）。入っちゃったらもう周りは文学少女女ばかり。今はそうじゃないけど、昔はフランス文学も英文学も、いわゆる文学部は小説や文化が本当に好きな人が入るような所だった。僕はさっきも言った社では先見の目があったね（笑）。そうそう、今はどうか知らないけど、当時の早川書房は面接がすごかった。知ってた？
——いえ、知らないです。
風間 ペーパーテストが終わった後に面接があるんだけど、それが何次まであるのか事前に知らされない。面接が終わって受かったと思っで一安心していると、また来てください、という連絡があり、その繰り返しが続く。精神的におかしくなりかけた（笑）。その辛い面接の中で僕の場合、異端文学や幻想文学、今ならSFやファンタジーといった作品について語りまくってアピールした。だから早川に就職した時には、SF編集部配属されたんだよね。そこで何冊かSF文庫を編集していたら、SFブームがきた。

風間賢二



かざまけんじ ● 1953年、東京生まれ。英米文学翻訳家、幻想小説研究家。早川書房勤務時にはハヤカワ文庫 FT を創設。著書は『ホラー小説大全』（第51回日本推理作協会賞評論その他の部門受賞）、『ジャンク・フィクション・ワールド』など。訳書には、スティーブン・キング『ダーク・タワー』シリーズ（新潮社）、アメコミ『ウォーキング・デッド』（飛鳥新社）ほか多数ある。

早川書房と幻想文学



明治大学SF研究では、スティーブン・キングのファンタジー作品『ダーク・タワー』映画化が本格的に始動した事に合わせ、同作品の翻訳家にして幻想小説研究家である風間賢二先生に取材を依頼した。
取材・文 柴野正太

■ハヤカワ書房に至るまで

——本日はよろしくお願ひします
風間 こちらこそ、よろしく。

——今日は翻訳家であり幻想文学評論家である先生にSFの前身とも言える作品や勤めていた早川書房・翻訳作品について取材したいのですが、まず風間先生がこの分野へと道を進めたのはなぜなのかお聞かせしてもらえますか？

風間 大学時代に出会った本がきっかけなのだけ。最初から話す……高校時代まで僕はマンガしか読まなかった。文学少年でもなんでもなくて、バンドとかやってた。それから大学のフランス文学に間違えて入っちゃったから。

——間違えたのですか？

風間 うん、間違い（笑）。入っちゃったらもう周りは文学少女女ばかり。今はそうじゃないけど、昔はフランス文学も英文学も、いわゆる文学部は小説や文化が本当に好きな人が入るような所だった。僕はさっきも言った



『愛に時間を』R・A・ハインライン著、矢野徹訳。

— SF文庫ではなくて？

風間 うん、早川のSFと言えば、青背白背の文庫を思い浮かべるだろうけど単行本を出したんだよね。今でも思い出したように時たま出ているんじゃないかな(笑)。そこで僕はR・A・ハインラインの『愛に時間を』とP・K・ディックの『パーマーエルドリッチの三つの聖痕』を担当して…それからイタロ・カルヴィーノの『レ・コスミコミケ』やダニエル・キイスの『アルジャーノンに花束を』など、今では青背になっていく作品なんかを単行本で出したんだよね。とにかくSFブームが起こって僕達の部署が一気に早川書房の花形になった。

■ ハヤカワ文庫FT

— 先生はその後もSFを担当なされたのですか？

先生はその後もSFを担当なされたので、先生が翻訳を行なったり評論を執筆したりするようになったのもその頃ですか？
風間 まあね。独立を意識したのは入社十年後くらいかな。早川は『早川クリエイティブ・ライティング・スクール』なんて別名もあって、仕事のノウハウと人脈を築いたら十年くらいで独立するのがあたりまえのような風潮になっていったから、当時はね。仕事は楽しかったけどね。まわりの連中が次々に辞めていくので、なんか残ってはいけなかなかな？なんて思ったりして(笑)。ただし、単に退社しても、他の出版社に鞍替えするならともかく、筆一本で生活していくには、「僕、翻訳できます」だけじゃ妻子は養えない。そうなる、翻訳以外でも何か専門分野を習得しておいたほうがいい。僕の場合、それまでの蓄積としてSFやファンタジー、ホラー、幻想文学などがあり、その他にも学生時代に学んだフランス文学を核とした海外文学、なかでもポストモダン小説に精通しているというところで売り出した。



● 『イルスの豎琴』シリーズ①『星を運びし者』 『アラバスク』等で有名な山岸涼子がカバーを担当。

風間 いや、SFブームが起きた後にSFでは少ない女性読者を獲得しようとしてファンタジー作品を担当するようになった。SFの次はファンタジー(のブーム)がくる、という予測もあって、ハヤカワ・ファンタジー(F

T)文庫の創設に携わった。それが79年の事だね。ただファンタジーと言っても、それまでは荒俣宏と紀田順一郎が編集した『世界幻想文学大系』(国書刊行会)と月刊ペン社の妖精文庫といったものがあつたぐらいで、とにかく知名度が低かった。そんな中、パトリシア・マキリップの第一回『世界幻想文学大賞』受賞作『妖女サイベルの呼び声』を最初に出したわけなんだけど、賞の名前もマキリップという作家もほとんど誰も知らないわけだ。ピーター・S・ビーグルの『最後のユニコーン』とかモダン・ファンタジーの傑作も文庫FT創刊初期の頃の作品だね。『最後のユニコーン』はアニメーション化に合わせて出版する予定だったけれど、これがまさかの日本未公開となってしまって、せつかく相乗効果を狙っていたのにオジャン。おかげで、名作なのにたいして売れなかった。そもそも文庫FT発刊当初はファンタジーという言葉自体が我が国では得たいの知れないものだったからね。要するに、当初は成績がよくなかった。そうはいっても早川書房の偉いところは、

■ 幻想文学評論家へ

先生が翻訳を行なったり評論を執筆したりするようになったのもその頃ですか？

風間 まあね。独立を意識したのは入社十年後くらいかな。早川は『早川クリエイティブ・ライティング・スクール』なんて別名もあって、仕事のノウハウと人脈を築いたら十年くらいで独立するのがあたりまえのような風潮になっていったから、当時はね。仕事は楽しかったけどね。まわりの連中が次々に辞めていくので、なんか残ってはいけなかなかな？なんて思ったりして(笑)。ただし、単に退社しても、他の出版社に鞍替えするならともかく、筆一本で生活していくには、「僕、翻訳できます」だけじゃ妻子は養えない。そうなる、翻訳以外でも何か専門分野を習得しておいたほうがいい。僕の場合、それまでの蓄積としてSFやファンタジー、ホラー、幻想文学などがあり、その他にも学生時代に学んだフランス文学を核とした海外文学、なかでもポストモダン小説に精通しているというところで売り出した。

— 先生がホラー小説、とくにキングを扱いだしたのもその時ですか？

風間 うーん。ただキングを読んだのは意外と遅かったよ。早川にいたとき、エージェン



▲『妖女サイベルの呼び声』パトリシア・A・マキリップ著、佐藤高子訳、1979年。●ハヤカワ文庫FT最初の作品。

▼『最後のユニコーン』ピーター・S・ビーグル著、鏡明訳、1979年。●ハヤカワ文庫FT11冊目の本。現在は絶版。



あきらめずにしつかり出版し続けるところなんだ。

— なるほど。ちなみに今のハヤカワ文庫FTでそれなりに儲けが出るようになったのはいつ頃、どのような契機があつたのですか？
風間 知名度という面ではヴィデオ・ゲームが発売された時だね。『ドラゴンクエスト』や『ファイナルファンタジー』といった作品が世に出て、ファンタジーという概念が浸透すると書店にも売りやすくなった。あとは創刊翌年1980年にマキリップの『星を運びし者』——『イルスの豎琴』シリーズなどで人気少女漫画家(山岸涼子や萩尾望都な

トから『デッドゾーン』(1979)が送られてきて、翻訳出版を検討してくれと言われたけど、キングのことをまったく知らなくて、周りからは「今日のアメリカン・ホラー界の巨匠なのに知らないの？」という感じで、面接で幻想文学を自負していたことの真偽を疑われたね(笑)。それからしばらくして、ハヤカワで『闇の展覧会』(1980)というモダンホラー・アンソロジーが出て、それにのちに映画『ミスト』にもなった『霧』が収録されていて、それを読んで衝撃を受けた。「こんなトンデモB級オモシロ小説を書ける作家がいるのか!」という感じ。現代の語り部たるキングの名に恥じない中編だよ。キング作品は数多くあるけど、初めての読者には『霧』がおすすだね。ぼくはその手の作品、完璧なエンターテインメントに免疫のない時に読んだから、ぶったまげたけどね。実を言うと、当時はまだ純文学志向の頭の固い青年だったのだよ(笑)。



『闇の展覧会・霧』(ハヤカワ文庫NV) ●S・キング『霧』をはじめ、D・エチスンやL・タトルのホラー作品を収録した短編集。

——そう言えば、先生は『ホラー小説大全』の中で現代のキングに至るまでの系譜を18世紀の異端文学・幻想文学から書いていますが、日本でもそのような怪奇小説・幻想文学の系譜は存在するのでしょうか？

風間 うん、あるよ。どこから始まるかは厳密には言えないだろうけど、『雨月物語』や戯作『南総里見八犬伝』や怪談伝奇譚などから脈々と紡がれている。だけど明治期の黒岩涙香の翻案もの、大正末から昭和初期の江戸川乱歩や雑誌「新青年」なんかはもう海外のミステリーや異色作家短編の影響をばりばり受けていたね。その時代と言え、1930年代だけど、アメリカではパルプマガジンが隆盛を極めていて、要はホラーのH・P・ラヴクラフト、ヒロイック・ファンタジーのR・E・ハワード、ハードボイルドのダシル・ハメット、それと数多くのSF作家の作品がとにかく創作発表されていたわけね。だから明治以降の日本は海外のセンス・オブ・ワンダーを吸収しながら独自の怪奇幻想譚を創作していったと言っている。

■『ダーク・タワー』の世界

——キングの話に移ったところで、いよいよ映画が動き始めたスティーブン・キングの『ダーク・タワー』シリーズについてお話を

伺ってよろしいですか。

風間 『ダーク・タワー』シリーズはキング・ワールドの集大成ともいえる作品だね。ただダーク・ファンタジーという事もあって、一般のキング作品とはちよつと趣を異にしているよね。ホラーやファンタジーの要素はあるけど、基本的には西部劇。ひとこと言え、西部劇版『指輪物語(ロード・オブ・ザ・リング)』なんだ。——映画化に関しての話は先生に何かきていますか？

風間 実は、原作の日本版は新潮文庫で刊行されているけど、今は絶版状態。でも、映画化の話が本格的に動き出したので、復活しそうだよ。それに合わせて、シリーズのスピンオフ、というか四巻と五巻とをつなぐ物語4巻『THE WIND TROUGH THE KEYHOLE』も訳出されるかも知れない(ちなみに、『ダーク・タワー』シリーズは全七巻)でもなあ、西部劇というのがネックだよ。

——日本では西部劇は売れない？

風間 最近だとそうだよ。それに7部作というのも怖い(笑)。ナルニアとかライラとか、パーシー・ジャクソン、ダレン・シヤンなどの映画化の失敗を想起しちゃうね。原作では、主役は白人で、読者の大方のイメージはマカロニ・ウエスタンの名作『夕陽のガンマン』のクリント・イーストウッドなのに、

■『ウォーキング・デッド』の魅力

——次に日本でもドラマがヒットしている『ウォーキング・デッド』の話を聞かせもらってもよいですか？

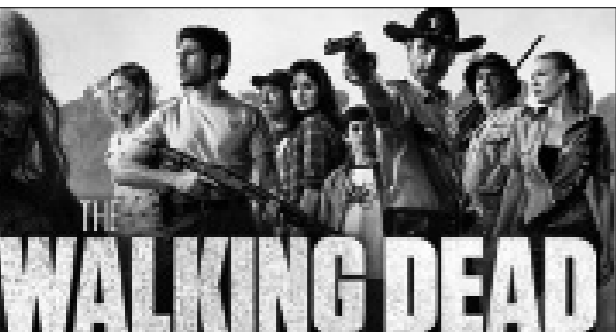
風間 日本版を出している飛鳥新社の編集者さんとアメリカ旅行をしている時に原作アメコミを勧められたのが最初の出会いだね。だけどその時は読まなくて、のちにTVドラマ化されて全米で大評判になったので、まずはそのドラマを見た。それで「こいつはすごい面白い」ということで、翻訳しようという話になった。おもしろいのは、原作のアメコミとTVドラマは一種のパラレルワールドみたいな関係になってるんだ。つまり、大筋は同じようでも、異なる点が多々ある。だから、

TVドラマから原作コミックスに入っても、その逆のケースでも物語の先行きはどうなるかわからない。○○が原作だと早々に退場しているのにドラマだと生き残っていたり、原作には登場しないキャラがTVドラマでは重要なポジションにいたりとか。キャラクターが変われば人間関係も全く変わっちゃうし、エピソードもかなり異なったりする。原作コミックスとTVドラマと二度楽しめる構成になってるよ。ああ、そうか、ひよつとするところ『ダーク・タワー』の原作と映画版もそんな感じだったりして。期待できるね(笑)——ところで『ウォーキング・デッド』は他のゾンビ作品等と比較して特徴的な事などはありますか？

風間 『ウォーキング・デッド』は正統的な



『ウォーキング・デッド』全7巻
ロバート・カークマン原作、トニー・ムーア・チャーリー・アドラード作画、風間賢二訳。
本体価格三千円(飛鳥新社)



ドラマ『ザ・ウォーキング・デッド』は2016年現在シーズン6まで放送されている。



噂のネガン(コミック)とニーガン(ドラマ)。愛用バット"ルシール"と笑顔が印象的な人物。



原作「DARK TOWER」シリーズ。著者S・キングは1970年代から書き始め、2004年に完結。映画化によって翻訳版(新潮社)の再販と未翻訳書(写真右下)の出版が待たれる。

今回の映画化では黒人になっているしね。結構前にタランティノ監督の『ジャンゴ』って作品が主役を黒人にした西部劇ということも話題になったけど、その路線を狙っているのかな。それと、まだよくわかっていないのだけど、映画化作品はどうやら原作の忠実な実写化ではなく、原作シリーズの続編らしい。つまり、『ダーク・タワー』シリーズの新作がキングの小説としてではなく、撮り下ろし映画として発表されるということ。映画は、最終巻の第七巻の終わりから主人公のローランド・デスチエインの新たな冒険が始まるってことだね。うーん、原作原理主義の読者の反応がこわいよね(笑)。

ゾンビ作品だよ。ロメロ版のゾンビの後継。最近では同じくアメコミ原作のTVドラマ『I Z o m b e』という作品があるけど、これは方向性が全く違う。主役は女の子ゾンビで人は襲わず墓場で死体の脳味噌食べているのだけど、そうすると食べた脳味噌の記憶を得られるようになって、様々な怪奇事件を解決する。オカルト・ミステリー仕立てになっている。ヒロインのセクシー・キャラで売っている。『ウォーキング・デッド』は当然主人公リックの成長物語でもあるけど、ゾンビ世界で生きる人々を描く、一種のアメリカーン神話再創造の物語でもあるんだよね。

——『ウォーキング・デッド』にはゲーム版もありますか、それはやりました？

風間 もちろん。ゲームも面白いよ。発売されてすぐにやったけど(PC版)、当然、英語版なので、かなりむずかしかった。つまり、このゲームの分野はアドヴェンチャーなので、アクション・パートもあるけど、大半はいくつもの選択文をクリックして物語を進めるんだ。ところが文字送りが早くて英文を読解する前にセレクト時間が切れてゲームオーバーになっちゃう(笑)。まあ、あえて英語版に挑戦する方は少ないだろうけど、日本語版をおすすめしとくよ。原作やTVドラマ版とはストーリーはまったくことなるけど、



何人かお馴染みのキャラが登場するから、『ウォーキング・デッド』マニアにもうれしいゲームだ。

——『ウォーキング・デッド』を翻訳する過程で苦労した事などはありますか？

風間 コミックの翻訳は、まさに現在のアメリカ文化を知らないといけないから難しかったね。俗語は常に発展しているから、罵倒する言葉とか日本語を当てるのが大変だったね。ここだけの話だけど重要登場人物にネガンというキャラクターが出てくるけど、あれドラマ版だとニーガンって発音していて、「やらかしたー」って思ったね。まあ、名前の読みは日本人の場合だつてむずかしいよね。

——現在、『ウォーキング・デッド』翻訳版は7巻まで出ていて一応そこで物語の展開も切りがいいので一時刊行中断のようですが、今後続刊が出ることはありますか？

風間 もちろん、本国アメリカでは好評なので連載は継続されているけど、日本では少し難しいかもしれない。というのも、『ウォーキング・デッド』の編集担当者が飛鳥新社を辞めてしまったので、現状に何か大きな変化がない限り出ないかな。それこそ映画化とか——それは非常に残念です。最後に最近のゾンビもので何かおすすみがあれば教えてください。

風間 S・G・ブラウンの『僕のゾンビライフ』

(大田出版)という長編があつて、これは交通事故故にあつて死亡したのちにゾンビ化したけど生者の頃の意識を残している生ける屍の青年が主役。イギリスには『ゾンビ・アットホーム』というTVドラマがあつて、ゾンビになっちゃった奴が周りから迫害されたりして、ゾンビとしての人権を求めたりするけど、『僕のゾンビライフ』はその手の小説。エイズや人種差別のメタファーみたいな形でゾンビを扱うヒューマン・ドラマ系作品だね。後半は話の展開が変化球になるんだけど、これがけっこう腰を抜かすよ。純文学なのか娯楽作品なのかわからない面白さがある。他には集英社文庫から出ているアイザック・マリオンの長編『ウォーム・ボディース』。映画化されて、『マッドマックス』の銀色のスキンヘッドを演じていた青年がイケメンのゾンビ役やっていたんだけど、ゾンビと人間の少女との禁じられた恋愛物。ゾンビ版『ロメオとジュリエット』だよ。加えて一番新しいものでは、M・R・ケアリーの『パンドラの少女』(東京創元社)。「8日後」系列のウイルスでゾンビ化——作中ではハンダグリーズっていう化け物に人類がなっていくんだけど、そんな終末世界に謎の救世的少女が現れるという設定。最近出た翻訳小説だとこんなもんかな。なんにせよ、

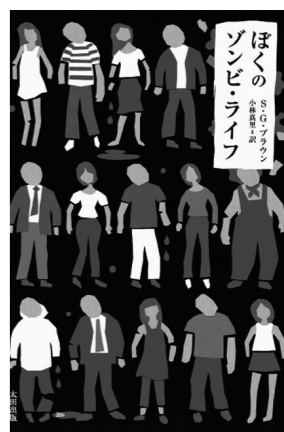
最近何かと話題のテラフォーマーズの映画評、面白いんじゃないか

今思えば悪魔のささやきだったかもしれない。実際のところ、私自身もいろんな意味で面白そうだと感じたのは間違いない。

このページを読んでいる読者諸君はおそらく、いかに「テラフォーマーズ」が面白くなかったか、もとクソ映画だったかというところが気になって仕方がないのではないだろうか。先に謝っておこう。残念ながらその期待には添えそうもない。実を言うところの映画、クソ映画ではないのである。あえて言うなら「映画になりそこなつた何か」といったところだろうか。

あらすじ

二十一世紀、人口爆発を迎えた人類が選択した火星移住計画。人類はコケとある生物を送ることで火星を地球化させようとした。それから五百年。計画の仕上げのために火星へ送り込まれた隊員十五名のミッションは、その生物の駆除。ところが、“ある生物”は人型に異常進化した凶暴な驚愕生物へと姿を変え、隊員たちに次々と襲い掛かる。絶体絶命な状況のなか、彼らの身体に秘策が仕込まれていたことが明かされる。昆虫のDNAによって虫の姿に“変異”し、超人的なパ



▲『ぼくのゾンビ・ライフ』S・G・ブラウン著、小林真理訳。本体価格 2000円 太田出版



▼『パンドラの少女』M・R・ケアリー著、茂木健訳。本体価格 2000円 東京創元社。

英米ではゾンビはブームで、小説でもゾンビ・アポカリプスものというサブジャンルができていくほどだけど、日本での紹介はさっぱりだね。はつきり言って、一般人のほとんどがゾンビ嫌い。でもその点、ヴァンパイアは人気あるよね。耽美・BLにできるし(笑)。とにかく、女性に受けないとだめだよ。ああ、それを思うと、映画版『ダーク・タワー』も主人公をイケメンの渋い中年ちょい悪オヤジ風の人気白人男優にしてほしかったな(笑)。——女性受けを狙うとすれば確かにその通りですね。本日は早川書房から翻訳作品まで素晴らしいお話をお聞かせいただきありがとうございます。ございました。

ワーを發揮できるのだ。騙されたことに怒りながらも、どう猛すぎる力を与えられた小町小吉(伊藤英明)のもと立ち上がる隊員。ついに人類対テラフォーマーの壮絶な戦いが始まる!だが、その裏で、もうひとつの陰謀が着々と進んでいた。

映画テラフォーマーズ公式サイトより実践・テラフォーマーズVS俺

本作の設定や登場する昆虫、ストーリーの大筋の流れは原作第一巻になぞられているが、いくつか根本的に異なる点がある。お気づきだろうか。原作では様々な国からゴキブリ駆除のための隊員を募り、国家間の陰謀がひしめき合う様子が一つの魅力となっているが、そういった要素は大人の都合で全て排除されてしまっている。映画では、

日本が単独でゴキブリ駆除をおこなう登場人物全員日本人、ほぼ全員素人で訓練を受けていない、ヤクザ参戦

以上のように日本人大喜び間違いなしの設定が追加されている。

まずはこの映画の数少ない良心について言及したい。一つはBGMである。劇場効果があったのかもしれないが個人的には臨場感が出ているように感じた。もう一つは戦闘シーンと要所要所のCGが挙げられる。戦闘につ

いてはスピード感があつたために楽しめた。ただ、この映画のほとんどが戦闘によって構成されているために中盤からはどうしても飽きてしまう。宇宙船のCGについてはそれなりといった感じ。特筆すべきこともないのだから良かった点を無理やりにも引つ張り出すとすると必ず上位に食い込んでくる。

さて、ここからはなぜ酷評されるのか、どうすればこうならなかったかについて考えていきたい。

私が一番文句を言いたかつたのは敵であるゴキブリだ。諸君はゴキブリと言われたとき、どんな生物を想像するだろうか。おそらく多くの人が「黒光りした気持ちの悪い例の虫」を想像するのではないだろうか。この映画のゴキブリ、茶色である。無論、黒光りもしていない。作品の特徴の一つともいえるゴキブリの生理的な気持ち悪さが映画からは伝わってこなかった。襲ってくるのはヒト型の茶色い化け物という認識が一番正しいといえるだろう。もちろん、昆虫人間と化した登場人物たちのビジュアルも酷い。江戸時代の人々がこれを見たとしたら、未来では歌舞伎がトレンドなのかと勘違いするに違いない。

次に脚本上の問題点だ。すべて挙げてしまうと足りなくなるので、いくつかは割愛させていたきたい。この映画の低評価の理由

テクノクラートの聖母

1

小説・神田隼／絵・あしゆう

メロヴィング連邦の首席宰相、名はクロヴィス、かれが諸国を征服して欧州全域をその絶対政権のもとに置いたのは二十年前のことであった。それまでこの領域は、諸方に主権国家が割拠し、つまりは分裂している状態こそが常態とされてきた。むしろ統一のほう

が異常であつたといつていい。

「――あんなやつが」

首席宰相か――と、その在正中、演説や訓話をメディアによって目撃した多くの者がクロヴィスをあなどつた。それは経済的征服によつてほろぼされた主権国家の遺民としての感情もあつたであろう。しかし一方、個人によつて欧州が統一されるといふばかげた、いわば絵空事のようなことを現実にしてしまったことが、ひとびとにかえつていかかわしさを感ぜさせる結果となつていた。第一、首席宰相という名称そのものが、かつては前世紀の政治的ポジションにすぎなかった。この変わった名称は欧州の所有者・クロヴィス自身の創作であつた。言葉の意味を変え、それが

はこの点に集中している。まずこの映画、登場人物の命がとても軽い。中盤は映画というよりゴキブリによる人間たちの殺戮ショーを見せられている気分だつた。戦闘前、もしくは戦闘中の二、三分に及ぶ世界観不明のミニドラマによつて、そのキャラクターの生い立ちや状況、火星までの経緯が簡単に説明され、殺される。この流れ作業によつて登場人物を減らしていくのだが、ヤクザ二人に至つては謎の男気を發揮、昆虫人間化することなくゴキブリの扱う銃で死んでしまう。まさかお笑い担当だつたとは……恐れ入つた。さらに設定をややくしくさせたのがラストシーンだ。船内で山田孝之演じる蛭間一郎が何の変哲もない銃一発でゴキブリを仕留めてしまうシーンがある。昆虫人間化なんていらぬじゃないやないか、最初から銃で戦えや、と思わずツッコミをいれてしまう衝撃のラストである。制作の意図は全くわからないが、それまで行つてきたことを全否定する形でこの映画は締めくくられている。要点を挙げると以上のようなになる。実際は両手で到底数え切れないほどのツッコミ所、矛盾点が存在しているが本当にきりが無い。冗談でもなんでもなく内容のメモをとつていたノートが二ページ埋まつてしまった。

ではまとめに入つていきたい。この映画の

浸透してもいないのに、実体である「首席宰相」に対する尊敬心や親しみの習慣など、根付いているはずもなかった。

さて、クロヴィス以前には、地上に君臨する者として諸国家には王というものや、議会というものがあつた。ところが、かれはそれらの王政や議会制を一举に廃してしまつた。

それまでは、人民は生まれながらにして人民であり、さらには生まれながらにして王や貴族を神に似たものとして扱い、その天賦の地位を決して窺おうとしなかった。例外としては、議会を設けて王権を制限し、代表を議会に立たせて主権の行使の場としたことである。なんにせよ、わずかに普通選挙を行うにとまつたにすぎない。そうしたまやかしの儀式の繰り返しによつて、なんとか大地は治まつていた。ときに異災や大恐慌があると人民は群れをなし、食と安全をもとめて流浪した。王や議会はこの事態を顧みず、また、人民に信じられてきた神でさえ、かれの天に安住して何ひとつ施しをすることはなかった。クロヴィス以前とは、ただそれだけの時代であつた。

2

低評価たる所以はビジュアル面と改変により破綻した脚本、矛盾が矛盾を呼んだ設定にある。「ほとんど全部じゃないか」との指摘は謙虚に受け止めさせていたどころ。では、この映画はもう少しどうにかならなかつたのか。私個人の答えとしてはどうにもならなかつたと言う他ない。ビジュアル面の原因も勿論大きい。が、実写化という目的を達するための原作改変が脚本を破綻させている印象を強く受ける。嘘を成立させるための嘘をつき続けるのはやはり不可能なのだ。もう少し掘り下げると、昨今のアニメ・漫画原作の実写化ブームにまでさかのぼつてしまうため慎んでおきたいが、何を言いたいかというただただ残念だつたということである。ネットに飛び交うレビューや観客動員数の速報を見ているとわかる通り、得をしたと思われる人はあまり見受けられない。(誰も得しないなら作らなくてもよかつたんじゃないか。) いずれにせよ昨今の映像業界に一石を投じることになつた映画であることに間違いはない。こうした作品がこれからも増えていくのか、危惧するばかりである。映画は「おれがやる」というセリフを広告に使用しているが、この映画を批評した「俺」から言わせてもらうに、「やらなくていい」。娯楽に溢れた現在、人類に敵対するような映画であつた。

翌日に自分が犯す罪のことを考えていたジョン・パシバル・ハックワースは、まじりともできなかつた。トイレにかこつけて、寝床から三度も起き上がり、そのたびに洗面所で顔色の悪い自分の顔をのぞきこみ、憂鬱な気分になつた。品のない肌の灼け方、中途半端にしかのびないあごひげ、吹き出物、そもそも造形からして不出来な顔のバランス。暗い部屋のなかでかろうじて見える自分の顔は、いつも通りの生涯最悪の光景であつた。

自分の思い描く世界をつくるために、前へと歩みだすだけのこと――そう何度も自分に言い聞かせていても、ハックワースは自身を持つ道徳心のようななにかにつつかえ、そのたびに心で転んでいた。

才覚や技能、権力という意味ではいつでも実行できることは疑う余地もない。首席宰相の補佐官として、カロリング連邦という巨大なネットワークを造りだしたこのジョン・パシバル・ハックワースにかかれば……。ハックワースは心のなかでさえ、それに続く言葉を容易にはつむげなかつた。しかし十年の歳月を経て、ようやく自分に正直になれる夜が来た。心をほんの少し作り変える努力が

実を結び、その先の言葉を初めて口に出したのだ。

私（ハシワラエス）であれば、首席宰相に成り代わることができる。主君（人君）の死を利用できる。

3

爆発は数百メートル離れた建物の窓さえ吹き飛ばしたが、火災は発生しなかった。

後日、ソルフォード大学の地震計に爆発が記録されていたことが判明し、時刻は正確に特定された。午前三時五十二分。爆音に飛び起きた住民たちは数分とたたずに消防や救急隊の会社に通報し、ネクサス捜査社の夜勤オペレーターはちょうど四時過ぎに幸次郎（ヨシジロ）・吉川（ヨシカワ）に電話してきた。現場への急行についてオペレーターが訊くと、消火と初期捜査の邪魔になるだけでしょうから、と幸次郎は翌朝まで待つことにした。かわりに一時間近く書斎の端末を前にして、コーヒーを飲み、タイプ音をひびかせないよう注意しながら、背景情報を収集し、ヘッドセットで現場をモニターした。

幸次郎が現場に到着したとき、そこはある種の穏やかな空間となっていた。

地元の消防会社は爆発の危険がないことを確認して引き上げてしまい、一方で捜査社の

いて。私よりよほど詳しいわよ。見込みがある人間にはなんでもしてくれるわよ」

4

隅に座っていたニーナ・オブライエンは食器を押しのとけると、テーブルに身を乗り出した。

「困りましたね。単純に犯罪が発生し、わたしたちが巻き込まれたというのならともかく、明確な敵意をもった攻撃を受けるとなると」手に持ったマグを置いてつぶけた「これは対策を施したあとで、報復にうってでなくてはなりませんね。世界規模での戦争が始まりますよ。首席宰相と称する、あのクロヴィスという男が死んだといったところでしょう」

いきなりそう言われて、ひどくめんくらった幸次郎は、目を通していた電子端末をおいて、その上から、きびしく冷たい詰問するような目を、ニーナにそそいだ。

その女が飲み物を勧めるような気軽さでLEI社のオフィスに自分を招き、客間の向かい側の席に腰をおろしたときから、幸次郎はニーナ・オブライエンに驚愕していた。この時代、先進テクノロジ企業（テクノロジー企業）のオフィスや研究施設は、機密と重要データ（データ）の塊であるので立ち入りは困難を極める。なんらかの警

科学捜査課はひきつづき瓦礫の山をなめるように調査中。濃いブルーの制服をきた数人の装置をもった捜査課員が電子音をたて、その音が鳥たちのさえずりにほとんどかき消されている。

現場はマンチェスター郊外の住宅とハイテク産業施設が入り混じる閑静で緑豊かな地区にある。このエリアには研究室用の試薬や調合薬の工場、科学用または航空宇宙産業用の精密機械の工場、そして二十七はくだらない生体認識工学（バイオ・コグニティブ・生命向上インターナショナル）の企業が並び――そのひとつがこのLEI社で、先刻までそのコンクリート製の建物が雑然と広がっていた場所がねじ曲がった鉄骨と、その周囲に散乱する白く粉を吹いた残骸の山と化している。

車からおりるとき、ジャネット・ランシングの姿が目にとまった。眉ひとつ動かさずに建物の残骸を見渡しているが、医療チームから手渡されたらしい毛布でくるまり、体は縮こまっている。軽いショック状態にある

LEI社の重役の姿は、情報収集ソフトで得た外見通りであった。顔の汚れがひどく、髪もひどく荒れていて尋常ではない。身づくろいする余裕がないのだろうか。恐ろしい体験の中心におかれた表情をしていた。

幸次郎はランシングに歩み寄って、声をかけた。「コージロ・ヨシカワ、ネクサス捜査

察的、ないし司法的な力により介入がなされるとしても、基本的にそれは強制や恫喝によるもので、企業側の招待によるものではない。そうした背景から、ニーナの招待は幸次郎の度肝を抜いていた。前時代であれば大量破壊兵器の管理区画にまったく無関係の部外者が招待されるようなものである。曰く、幸次郎さんの捜査に必要な情報がここにはたくさんあると思うのです。仕事が早く進むほうが世の中快適というものでしょう？ あ、ご安心を。私は幸次郎さんを信じられる方と考えていますから。

5

クロヴィスはある時から余人を身辺に近づけなくなっていた。暗殺を恐れてとも、隠遁趣味によるものだともいわれているが、ともかく人を避けるようになった。パリの官邸には殿舎が二百七十棟もある。その宏大な官邸のどこにかねががあるかも、余人には知らせないようににした。ただ機械のハックワースだけは例外であった。例外を設けておかねば首席宰相としての仕事ができなかったから。

ハックワースが府中（マドラー）から政治に関するリポートを官邸（ヴァイク）のクロヴィスのもとに運んでくる。決裁を乞うためであった。決裁が済むと

社のものです」

相手は眉をひそめながらも名刺をうけとると、廢墟の周囲でガスクロマトグラフやホログラムの器械をふりまわし、自律無人機に指示をだして現場をスキャンさせている技術者たちに視線を移した。

「あれはあなたの会社の？」

「そうです。今朝四時からここをあたっていきます」

ランシングはかすかに作り笑いを浮かべた。「なんでここが攻撃されるんでしょうね。はは。ここはね、研究開発しかしていませんの。ドラム缶数本の有機溶剤にどんな不始末があつたからといって、近代建築をものの数秒で瓦礫の山になんかできるんでしょうね」

ランシングは名刺に目を落とした「不可能よ。破壊工作としか信じられませんわ」

「なるほど。爆破攻撃とは……。しかし攻撃の対象になる研究とは一体？」幸次郎は同情するように仕事をすすめた。

「文明のバックアップについての研究。世界全体が終末を迎えるようなカタストロフへの備えよ」ランシングは両手で目をマツサージしながら続けた「世界規模の災害や戦乱があつても、文明を維持できるようにするシステムを扱っているの。今更隠すこともありませぬわ。詳しくはニーナ・オブライエンに聞

それらの書類を自律した政府機関である府中で運んだ。府中を主催するのは高度人工知能群と、社会ラーキテクトたちである。クロヴィスの投資や持ち株会社の経営、社会構築や武力による対外遠征もすべてこのマルドゥークによって立案され、実行された。そのようなクロヴィスの忠臣たちでさえ、自分の主君が官邸のどこにいるのかを知ることはできなかった。首席宰相にかかわるすべては、近侍であり、秘書官でもあるハックワースの管轄であった。

6

女とのあいだにある大理石のテーブルの上には、彼女の昼食である大カップのコーヒーと、バターつきロールパン、それにオムレット一皿がのつていた。幸次郎の分ということなのか、同じものがもうひとつセット並んでいる。爆破事件の詳しい調査のため話を伺いたいと幸次郎が連絡をとると、「昼食をとりながらでよろしければ」とへ人工進化プロジェクト主任（プロジェクト主任）は回答し、こうして幸次郎はゲッティンゲンまで訪れた。そして捜査員として破格の歓迎を受け、ソファに座っている。

ニーナ・オブライエンのもてなしや、態度、明らかに不敬罪と思われる不穏な発言。これ

らひとつひとつは、幸次郎のような者にとつては大して驚くようなことではなかったが、それが組み合わさり、有機的なひとりの人間のふるまいとして目撃すると、違和感が思考を支配して動揺を引きおこす。

「そうした今後の対応や宰相閣下の生死はともかく」と、幸次郎は穏やかだが威厳のある口調で、「この事件は明確な攻撃であり、攻撃方法の候補こそ絞られつつありますが、犯人について、現在のところ有効なプロファイルを構築できる段階ではありません」

「お言葉ですがね、刑事さん」警察力が民営化されて久しいにもかかわらず——幸次郎が三歳の頃の話だ——古い警察の階級でニーナは呼びかけ、「私はこの攻撃の犯人を捜す必要性を感じていません」

「それはどういう意味でしょうか」

「わたしたちはほぼ何も損害を受けていません。世界中に分散したデータベースに全データのバックアップが高度に暗号化されてアーカイブされています。経営上のも科学的なものについても。それに実証実験中のマキナ……一般名称ではアンドロイドと云いましよるか、これについてはほぼ無傷で損傷を受けていないことを確認してあります」

「研究施設ひとつが壊滅しても損害なし、と？」

を多くの人民は植えつけてしまったことは、当の創設者も、機会をうかがう篡奪者も気づいてはいなかった。

8

ニーナは応接間の隅の席でほぼ二人分の昼食を食べながら、相変わらず真剣に捜査社の聞き込みに応じていた。

「とにかく。攻撃された施設で行っていた研究とは」幸次郎が言った「なんなのでしょか。文明のバックアップについての研究とはうかがっています。詳しく説明していただけますか」

返事はなかった。ニーナは専門外の人間への説明を構築している。幸次郎は注意深く、丁寧に、綿密かつ丁寧に質問している。すこしは相手を自分のペースに引き込むために。「刑事さん。あなたは、現在のヒューマノイド・テクノロジというものがどれほどの水準に達しているのかをご存じでしょうか。いや、ごく大ざっぱな認識で結構です」

「人工臓器などの実用化や、こころの理論を持つAIの開発が成功したことは聞いていますが、ヒューマノイドについての開発はよく知りません」言葉をきって相手をみつめたが、反応が鈍い。こたえに満足していないと

「ここではなく、当社の工場のどこかを破壊していたとしたら、大きなダメージでした。資金流入が断たれると致命的です。しかしあの研究所は資金を生む施設ではありませんでした」ゆえに、大した問題ではないとつづけた。

ニーナはコーヒーをすすり、幸次郎が昼食は済ませたと遠慮したオムレツの皿を手繰り寄せてから切り出した。

「保険会社は再建費を出してくれるでしょう。六か月で業務再開。犯人は時間を無駄にしませんでした。研究は継続されます。加えて、私は犯人に心当たりがあり、おそらく証拠ももうじき手に入りますので、あとは刑事さんがそれを活用していただければ」ニーナは手を止めて「私たちの側としては解決ですね。ところで幸次郎さん。当社で働いてみませんか？」

7

首席宰相は、なんとなく統治し、統治されているという過去のあいまいな制度のすべてを一掃した。それにかわるに高度情報網と自律工場群、高機能人工知能を用いた中央集権体制というふしぎな機構をもちこみ、大綱のように欧州にひろげ、精密な思考をし、自らを再構築しつづけるアンドロイド群による官

という表情。そこで幸次郎は静かに話をつづけた。それはよくよく考えたうえで発言だと思わせるためであり、軽々と口に出したのではないと暗に示すためだった。

「あとは……そう、人間らしい反応をさせる高価なシリコン製のラブドールに対してへセクサロイドの広告を用いるのは不当だと裁判を起こしたひとがいるくらいでしょうか」

「さすがですね。この開発分野の本質をよく突いておられます」ニーナは上機嫌に「人間の体をもつて、人間として活動できるという意味では、ヒューマノイドはまだ開発できていません。しかし——」幸次郎とニーナの目が合った「自らの手による開発はまだまだできなくとも、誰かが造ったものを保有することとは可能です。そう、私たちはそういったヒューマノイドをすでに二五体保有しています」

9

ジョン・パーシバル・ハックワースは、首席宰相とともに官邸の中で日夜行動を共にしていた。トレヴィイスの認識ではハックワースとは人の形をした情報端末にすぎなくとも、ハックワース自身にとっては、自己とは人間に相当する自意識を持つひとりの個人である。

僚組織ですべての人民をつつみこんでいた。その原理は、法と秩序合理性・持続可能性。クロヴィスの卓越した政治的、かつ経済的、かつ軍事的、かつ人心掌握的手腕が、欧州の隅々まで覆っていた。「主権国家の時代は終わり、すべてがメロヴィングになった」

この煩瑣さは、欧州の人民たちには耐えがたい。法のうるささだけでなく、群れをなした人工知能という官僚をどう尊敬したらいいのか、過去に伝統がないだけにみなとまどつた。

首席宰相だけが、この地上におけるただ一人の主権者だということだけはひとびとに理解できた。宰相一人が官僚組織をにぎり、それを手足のようにつかい、すべて宰相自身が裁決しているということである。権力を世襲するのも首席宰相家だけしか認められない。貴族や代表者による議会というあいまいな中間階級が消滅した以上、宰相一人が、じかに人民という海に対してなのだ。人民には見えた。言いかえれば、一本の釘に宰相がぶらさがっているだけで、あとはすべて人民のみという風景になってしまっている。

（つまりは、宰相を倒せば、倒した者が「宰相」になれるということではないか）

という奇抜な、しかしあたりまえの、ともかくも前時代にはなかったふしぎな政治認識

（わたしは、ほぼ人間に等しい）

と、ハックワースは常に考えている。だが同時に、（わたしは人間とは違う。だがその違いは正の方向に向いたものなのだ、わたしはむしろ人間に優越するのだ）とも思っていた。

（そして、私は主君を殺すことはできない。

しかし死を待つことならば）

ハックワースは仕事に熱心に取り組み続けた。

10

ホワイトボードがいまだに現役で用いられている前時代の客間では、重大な情報がいとも気軽に明かされた。そもそもここは客間ではあるものの、日ごろからニーナ・オブライエンがみずからの休憩所としてなかば独占的に使用していることや、猫と犬を飼っていることなど、ニーナがひとしきり満足するまで話したあと、ようやく本題へと回帰した。「たとえばランシングです。彼女は古典的な意味では人間ではありません。ヒューマノイドです」

ニーナは自慢するように発表した。

「つまり、彼女はヒューマノイドとおっしゃりたい？」幸次郎は神妙にうなずき、ためら

うように訊いた「どういうことですか……？」

「私はへマキナはほぼ無傷で損傷を受けていないことを確認している」と申し上げたでしょう。彼女のことなんです。そしてあなたも直接ランシングと一度顔をあわせたはず。そのときお気づきになられたと思っております」

「ランシングさんがヒューマノイドであると、



「オプ・ノ・エンは、オプ・ノ・エンの法事なんが面白いといっている。彼が面白い」とお尋ねする。ニナ・オプ・ノ・エン

ですか」

ニナは自然と笑顔になって言った「はい。攻撃直後から現場にいて、事故ではなく攻撃であったと自信をもって証言でき、かつ、やたらとボロボロの状態であった。のでは？聞くところによると、ランシングは胸部と腹部に深刻なダメージを負っていて、回復までに数時間要したようですよ」

11

ハックワースは単なるマキナではなかった。宰相が「詔勅」を発するときに必要な認識コードまであずかるという職を得ていた。この陰気な男が、欧州全域の支配者から絶大な信頼を得たのは、ひとえにトレヴィスという人間に愛された男のマキナであったからだった。

〈テクノクラートの聖母〉と呼ばれる一連のヒューマノイド群がいつ、誰によって建造されたのかは詳しくは分からない。聖母たちに遺る伝承に曰く、「ひとつ前の世界」。

ただ、聖母と自称するマキナたちの存在理由については明確に分かっている。それは文明のバックアップ・アーカイブである。

基本的な仕組みはふたつ。ひとつ、あらゆるアカデミズム的成果や技術的ノウハウ、社会そのものの再構築に必要な社会動員力を備えたアーカイブを、世界中に分散して保管すること。また高い自律防衛力をもつことで、自分自身を守らせること。ふたつ、美しい女性の姿をとることで、カタストロフ後の人間主体の世界において、保護や社会的地位が得られやすくすること。また、それにより技術伝承や社会の再構築を有利に進めること。

なにより美しい女性の姿のヒューマノイドであれば、高価でも開発し保有するインセンティブが働く。形骸化した主権国家や国際コングロマリット、一部の個人により聖母たちは広く求められたと伝わる。

ハックワースは例外的なマキナであった。女性ではなく男性の形をとり、通常よりも高い処理能力をもつ。本人こそ男の体をとっていることを憎んではいたが、主人であるクロヴィスにはその趣向から好都合であった。

また、マキナたちに人類の平等思想は薄い。高度な文明の再興こそが彼らの使命であり、格差の是正は必須ではないのだ。むしろ、王に相当するレジームを強化し、開発独裁を進めるほうが効率的といえた。クロヴィスは偶然にも血統に恵まれ、ハックワースと出合い、ハックワースが組織化した官僚と常備軍を享受したにすぎない。

クロヴィスの死（自然死とされている）を迎え、ハックワースはかねてより抱いていたクーデターの実行できる環境を得た。広大な国土と人民、みずからコントロールできる官僚機構と思いのままに操れる宰相家の人間たち。この巨大な遺産に対してみれば、ハックワースがようやく見出した自由な生というも幸福など、パリの官邸という密室におさまる小さなものであった。パリの官邸以外

12

のすべての領域。ハックワースの興味の世界において、首席宰相への不満、連邦への反乱は燎原の火のようにひろがることになった。

ニナ・オプ・ライエンは唐突に話を戻した。「おそらく、すでに首席宰相閣下は亡くなられています——暗殺というよりも病死でしょうね——そして秘書官のハックワースはその事実を隠しているとみて間違いありません」

幸次郎は反論や疑問を心に浮かべることをやめた。この女が断言していることは、おそらくそうなのだろうと受け取ることにした。とりあえず今日のうちは。

「秘書官のハックワースはやり手ですが、今やゆでたキャベツほどの威信しかありません。このままどうしようもなくなるまでクロヴィスの死を隠し続けるか、クロヴィスの子弟を適当に後継者に据えることになるでしょう」

幸次郎は自分にも思考力があるところをみせようと、あとを引き継いだ。

「おそらく実権をほとんど持たない後継者は蚊帳の外におかれ、現政権の閣僚と幕僚たちが後継者を争う戦いが始まったのでしよう。」

13

ハックワースはほとんど何もしなかった。詔勅を作成し、マルドゥーク（府中）とヴィキ（官邸）を往復する。もとよりこれが職務であったのだ。何ひとつ変わることはない。なにひとつ。

官邸の中のハックワースは熱中していた。野に満ちているかつての主権国家派や各地の軍閥・企業による反乱の火にはつよい関心を示さず、官邸という密室内で自分の権力を広げることに日々を尽くした。かれはクロヴィスの子の一人を新たな首席宰相に任命し、讒

【警告】

以下の文書はセキュリティクリアランスレベル3以上の職員にのみ閲覧が許可されています。不正な閲覧が発覚した場合、直ちに記憶処置、あるいは終了処置を行います。

サイト 1.9-1 は東アジアの主権国家に所在する ██████████ の高等教育機関に敷設された財団の研究施設です。サイト 1.9-1 の存在は当機関の公式組織図や会計報告にも記載されていません。以下の記録はサイト 1.9-1 で行われた SCP-2124 の追加実験の記録です。

SCP-2124 に関する資料 (© manwhat 2015)

SCP-2124 - Conceptual Knife (概念ナイフ)

<http://scpjapan.wiki.fc2.com/wiki/SCP-2124?pc>



要約

- SCP-2124 〈概念ナイフ〉とは「気をつける！ 見えないナイフが 箱の中」と手書きされた大型のピザボックスです。
- ピザボックスの中が完全にからっぽであることを十分に確認したにもかかわらず、「ピザボックスの中にあるというナイフ」を入手しようと意図した人間は、鋭いナイフのような不可視・不検知なオブジェクト (SCP-2124-1 実体と指定される) の発見に成功し、手で握って使用することができる。

言してあらゆる有力勢力を肅清しつつけた。「本当の首席宰相は私だ」ハックワースは大笑いした。もの静かな秘書官が自室でのみ見せるいびつな感情表現。「そうとも私こそハックワースだ。クロヴィスさま、いかがでしょうか。私はうまく出ていますか？」

14

幸次郎は捜査社のオペレーターと通話しながら、事件捜査の調査を進めていた。事件の特殊性のためか捜査は一向に進展しない。宰相の死去以来、連邦構成主体の独立宣言や、中央安全保障会議のメンバーへのテロなど、ニュースがあまりにも騒がしく、仕事などしてられないためでもある。幸次郎一人がいくら仕事に集中しても、研究課や司法課のスタッフたちがまともに出勤していないからだ。

〈捜査困難のため、レポート延期〉

幸次郎はやむなく「E」社に連絡を送り、そして転職先を探すために休職願いを上層部に提出した。給料が支払われなくなるまえに、有利な転職先を確保するには果断さが重要だ。

民営化されたとはいえ、警察力は警察力。

国家が自由市場により取引された高度な社会でさえ、有事にはかつての総動員体制に回帰するだろう。あらゆる社会勢力が互いを攻撃し始めた以上、幸次郎ほどの勢力に属するかを決める必要があった。メロヴィングは頼るに値するだろうか。上層部に武器と弾薬を返却する手続きをしつつ、改めて思いをめぐらせた。

社会インフラが崩壊しても福利厚生を保証してくれそうな働き口を求めするため、捜査社のオフィスを後にしながら、幸次郎はコーナ・オブライエンに連絡を取ることにした。

「コージロ・ヨシカワ。かつてネクサス捜査社の調査担当員として、お話をうかがったものですが」通話の相手からの十秒ほどの応答。「ええ、いまから伺います。よろしくお願います」

(結)

重たいゼリーみたいな感覚だったかな」

■■■■博士「あなたはその長さを認識することができたのですか？」

D-109298「重さしわからなかった。だがあれはどう考えてもノコギリくらいの重さがあった。ぶっ殺すのに最高の武器の重さだ」

■■■■博士「あなたはそれを使うことでここから脱出できると考えたのですか？」

D-109298「ああ、もちろんだ。あんたらは確かに銃を持っている。でも俺にはこいつがあった (D-109298 は落ち着いた様子で、拘束着を脱ごうとする試みを停止した)」

■■■■博士「そしてどうしました？ やけに大人しいですね」

D-109298「いや、今日はツイてる気分なんだよ」

インタビュー終了

補遺：実験終了後、特別収容房への移動中に D-109298 は SCP-2124-1 実態を生成。保安職員二名を殺害しサイト外に逃走、同日中にエージェントによって銃殺された。

SCP-2124-1 の生成において、取得者の箱の中身に対する認識が作用することは間違いない。しかしその限界が未知数であること、認識した人間の制御が困難であることから、オブジェクトクラスの格上げを申請する。

■■■■博士

解説

SCP-2124 - Conceptual Knife (概念ナイフ) とは大型のピザボックスです。このピザボックスには「気をつけろ！ 見えないナイフが箱の中」と手書きされていますが、実際には中には何も入っていません。しかし「ピザボックスの中にあるナイフ」を入手しようと意図した人間は、鋭いナイフのような不可視・不検知なオブジェクト (SCP-2124-1 実体と指定される) の発見に成功し、実際に手で握って使用することができます。

つまりこの SCP は「ピザボックスの中にあるナイフ」という概念を入手することができるオブジェクトです。「ナイフ」といっても人によりイメージするナイフ (ナイフという概念) には差があります。そのために元記事での実験でナイフの長さが異なっていたり、複数本のナイフが生成されたりしたのです。また元記事での暴力事件や、今記事での脱走事件の鍵は、この「ピザボックスの中にあるナイフという概念」を取り出せることにあります。

一度箱を見て、SCP-2124 というピザボックスの中に入っているナイフ (という概念) さえ理解してしまえば、ナイフを取り出すことができます。また取り出すのはあくまで自分のイメージする「ナイフという概念」なのでノコギリみたいな巨大なナイフさえ入手できます (最も薬物で当たり前の思考を外れたからこそですが)。

〈SCP-2124 追加実験〉

検証内容

SCP-2124 による SCP-2124-1 生成について

実験 SCP-2124-1.9-1-003-2016/06/XX

被験者：薬物投与により興奮状態にした D-109298

内容：D-109298 は実験エリアに入るよう指示された。D-109298 が実験エリアに入り、隔壁を閉鎖した後、遠隔操作で手錠が外される。D-109298 は興奮しているが暴動を起こす兆候は見せなかった。

■■■■博士の指示で SCP-2124 の蓋を開き、中からナイフを取り出すよう指示される。D-109298 は SCP-2124-1 を取得すると、著しく興奮し、銃を構えた警備職員をナイフで突き刺す動作を見せた。D-109298 が伸ばした腕からおおよそ 2 m の距離にいた警備職員は腹部を負傷した。その後 D-109298 は鎮静ガスによって拘束された。

「おおよそナイフといえるもののサイズではない、D-109298 へのインタビューを申請する」
■■■■博士

「鎮静状態に保ち、数日の経過観察の後、申請を許可」

サイト 1.91 主任

〈インタビューログ〉

対象者：D-109298 インタビュー担当官：■■■■博士

インタビュー開始

■■■■博士「ナイフを取れと指示されたあとのあなた自身の様子を教えてください」

D-109298「お前ら全員ぶっ殺してやる。このクソみてえな檻から出ることで常に頭がいっぱいなんだ、今もその時もな」

■■■■博士「続けてください。どうぞなんでも話してください」

D-109298「はっ！ あー、分かったよ。俺は箱にはナイフと言わずでっけえノコギリでも入ってないか期待してたんだ。タランティーノの好きそうなヤバイやつだよ。したらなんだア？ 空っぽの箱じゃねえか！ あんなもんを見せられてもナイフを取れなんて言われたからキレちまった。だがよ、手を突っ込んで握ってみると確かに重みを感じたんだ、

編集後記

今回の試みは非常に大変なものであったと言わざるを得ない。旧誌廃刊に合わせて、創作者・編集者が一気に消え、ほとんどゼロからのスタートであった。今回当会誌に原稿を書いてくれたのは私以外が今年加入したばかりの新入会員であり、創作が初めてだという人もいる。夏コミに出すということで、期末テスト前の締め切りの中で原稿を書いてくれた創作者たちには本当に感謝しかない。

そして何と言っても目玉記事である特別インタビューを引き受けてくださった風間賢二先生に感謝をささげたい。風間先生にインタビューを依頼したのは五月の終わりくらいであったが、先生は二つ返事で了承してくださった。取材は五時間もの長さでこの会誌全体を埋める事ができるほど濃い話をしてくださったのだが、さすがに全部載せる事はできないと要点を絞った記事にした事を読者の皆さんに伝えておきたい。

そして最後にこの編集技術を授けてくださった明治大学の授業DTPとIndesignにも感謝したい。編集・レイアウトも初の試みであったが、それなりに形にはなったと思う。全てこれら授業と編集ソフトのおかげである。

編集・レイアウト 柴野正太

発行

テクノクラートの聖母 Vol.1

発行日

2016年8月14日

2016年夏コミックマーケット

発行者 明治大学SF研究会

印刷所 (株)くりえい社 様



『テクノクラートの聖母』サークルカット
神田隼・作